慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	欧州統合過程とナショナルな政党政治 : 『欧州懐疑政党』を中心に
Sub Title	The European integration process and national party politics : Eurosceptical parties in France and U.K.
Author	吉田, 徹(Yoshida, Toru)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2011
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.84, No.2 (2011. 2) ,p.633- 672
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	□山宏教授退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20110228-0633

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

欧州統合過程とナショナルな政党政治

――『欧州懐疑政党』を中心に――

吉田　徹

0　はじめに
1　「欧州懐疑主義政党」の諸定義とその問題
2　欧州統合と「クリーヴィッジ」
2・1　肯定論
2・2　否定論
3　欧州統合のもとでの政党間競合
3・1　政党システムにおける「イデオロギーマップ」
3・2　政治的機会構造による懐疑主義の表出
4　仏英における欧州懐疑政党の展開と生成
4・1　フランスの事例
4・2　英国の事例
4・3　小括
5　おわりに――欧州デモクラシーにおける政党政治

政治ではなく、歴史が問題なのは明らかだ。どのような「収斂基準」が有効なのか、どのようなメカニズムがＥＵの一体性を確保するために採用されるべきなのかについては冷静に議論できる。しかし、起源をめぐる問題を落ち着いて論じるのは難しい。それは利益とアイデンティティの違いに由来するからだ。

Antoinette Spaak and Karel Van Miert, in *Les Frontières de l'Europe*, Bruxelles, 2001.

0　はじめに

欧州統合は、加盟国の政党政治と政党システムにどのようなインパクトを及ぼすのか――これが本稿で提起される問いである。とりわけ、欧州統合の深化の中で生成してきた、いわゆる「欧州懐疑政党（Eurosceptism Party）」を手掛かりに、その影響のあり方を探る。

欧州統合研究およびＥＵ研究において、政党と政党システムは[1]、それほど注目されてこなかったアクター／対象であった。例えば、欧州統合での政党研究の先鞭を付けた一人であるガフネイは「統合に関する言説の多くは政党に言及せず、政党に関する言説の多くは統合に言及しない」としている（Gaffney, 1996: 1）。事実、欧州統合／ＥＵ政治に関して版を重ねる標準的テクスト（Wallace et al., 2005）や、大学生向けの専門科目のテクスト（Cini, 2002）でも、政党に関する項目や解説は存在しない。政党は、閣僚理事会、欧州委員会、欧州司法裁判所、欧州議会といった数多のＥＵの機制と同じ地位を与えられていないのである。

しかし、加盟各国の政党はＥＵの諸機関のリーダー選出だけでなく、国内政治での欧州統合についてのフレーミング形成等において、大きな役割と機能を果たし続けている。例えば、欧州統合研究の古典のひとつ、Ｅ・ハ

ースの「欧州の統一（*The Uniting of Europe*）」（Haas, 1958）は、政党をナショナル・レベルと欧州レベルを架橋するアクターとして位置づけ、これが政治共同体の形成に大きな役割を持つものと規定している。つまり、欧州統合にまつわる政策形成や条約批准の過程でナショナルな政治の持つ機能は、必然的に政党政治への着目につながる。そもそも、「欧州のデモクラシーは、実際には政党デモクラシー」（Raunio, 2006: 247）である。よって、一国内の政党デモクラシーが、欧州統合によってどのような影響を受け、それによってナショナル・レベルでどのような変化が生じているのかを精査するのは、重要なアジェンダとなる。(2)

こうした政党政治の次元において、一九九〇年代以降、マーストリヒト条約（九二年）、アムステルダム条約（九九年）、欧州憲法条約（〇五年）、リスボン条約（〇七年）の批准過程で、また中東欧の新規加盟国において、強力な反欧州政党の躍進が観察された。(3) 大衆的不安（popular unrest）を抱えるようになったヨーロッパで、オーストリア自由党（FPÖ）といった欧州懐疑政党は、しばしばEU政治と国内政治をかく乱し、ナショナル・レベルでの政党間競合にも影響を与える存在となった（Leconte, 2005）。二〇〇九年六月に行われた欧州議会選挙では、アイルランドのリスボン条約否決運動を率先したリベルタス（Libertas）は、共通の旗印のもと、一六カ国にまたがる二〇以上の欧州懐疑政党・運動と連携、汎欧州的な懐疑組織として立ち現れた。(4) それでは、かかる欧州懐疑政党は、どのようにして生まれ、どのような影響をナショナル・レベルの政党政治に与えているのか。

本稿では、まず欧州懐疑政党とはどのような存在であるか、その定義と概念操作上の問題点を指摘する。次いで欧州懐疑政党が生成する前提条件として、ナショナル・レベルで、欧州統合に基づく新たなクリーヴィッジ（社会的亀裂）が生じているのかどうかを精査する。また、政党システムと政党間競合の次元で欧州統合争点がどのように作用するのかについて論じ、さらに一九八〇年代から二〇〇〇年代までのフランスおよび英国の政党政治の動態を比較分析する。

以上を通じて、政党政治を基礎にした欧州デモクラシーの構造的な困難が確認できるだろう。結論を先取りすれば、ナショナル・レベルへの欧州統合のインパクトは、確かに限定的なものに留まっている。歴史的に生成された各国の政党システムと政党配置／有権者市場は、強固なものとして存在するゆえ、欧州統合のインパクトは、各国政党政治の力学に適応する範囲でしか直接的には生じない。しかし他方では、政党政治と政党システムへの間接的なインパクトが確認できる。そして、民主的正統性が模索される欧州統合過程で、政党の利益媒介機能が後退しているという、相互連関的な問題が浮上しているのである。(5)

1 「欧州懐疑主義政党」の諸定義とその問題

「欧州懐疑主義（Eurosceptism）」を、*Oxford English Dictionary* は「欧州連合の権限（power）強化に反対すること」と定義している。本稿では、①欧州統合の現状に対して懐疑的である、②欧州統合のさらなる進展について懐疑的である、③欧州統合というプロジェクトそのものに対して反対することの何れかが、精神的・政策的態度として持続する態度（attitude）であるという、より広範な定義を採用する。

西欧の欧州懐疑政党を最も早い段階で分析した一人のタガートは、これを四つに分類している（Taggart, 1998）。ひとつは「単一争点型」とでも呼べる、欧州統合に関る争点のみに立脚して政治的動員を図る政党である。これには、デンマークの「EC連合反対人民運動（People's Movement Against the EC-Union）」やフランスのMPF（Mouvement pour la France）などが含まれる。次に「欧州懐疑的異議申立て政党」があり、これらは既存の大政党（『エスタブリッシュ政党』）に対抗する政党である。これには、スウェーデンの緑の党やフランス共産党が含まれる。三つめは、「欧州懐疑的立場をとるエスタブリッシュ政党」であり、政権与党の経験を持ちつ

つも欧州に懐疑的な立場をとる政党である。この数少ない政党にはノルウェーの中央党やポルトガルの社会民主中道党があげられる。最後には、「欧州懐疑派閥」があり、これはエスタブリッシュ政党の組織内の影響力ある欧州懐疑派を指し、英国の保守党がその典型である。

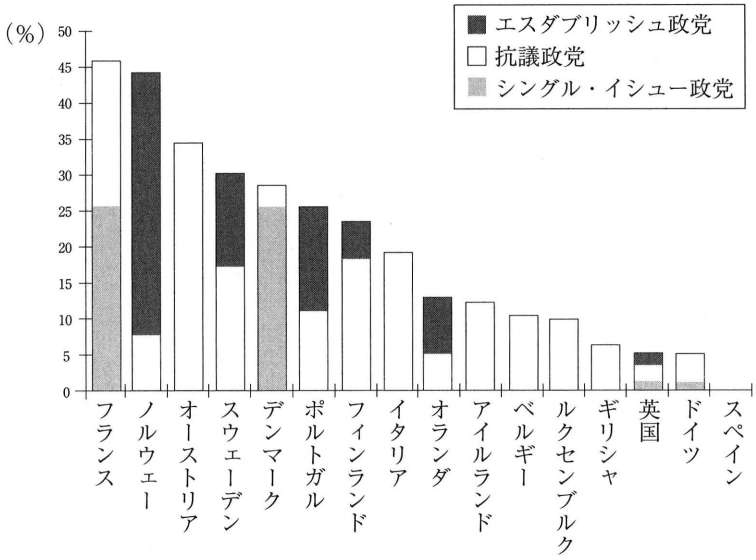
このように「欧州懐疑政党」は、かなり拡張的かつ包括的な存在である。そこには、原則として欧州統合に賛成しつつも、その政策――例えばEU拡大――に異議を唱える政党、欧州統合そのものに反対を表明する政党、あるいは欧州統合には反対しつつもその内実――例えば「単一市場の実現」――に賛成するといった政党も含まれる。端的に言えば、欧州統合支持がそうであるように、欧州懐疑主義にも濃淡が存在し、これが政党の立場にも反映されている。単純な欧州統合への「支持」と「反対」の構図、すなわち「どの程度のヨーロッパ（How much Europe）」ではなく、「どのようなヨーロッパか（What Kind of Europe）」が争点となっているのであれば（Tsoukaklis, 2003）、欧州懐疑政党を単に反EU政党として一括りにしてしまうのは間違いである。

なお、欧州懐疑政党の存在は、欧州統合に否定的、肯定的な国とは相関しない（図1参照）。最も高い親欧州的アイデンティティを持つ欧州大陸国（フランス、イタリア、スペイン、ルクセンブルグ等）、反対に最も低い周辺国（英国、デンマーク、アイルランド、ギリシャ等）の双方にまたがる形で、欧州懐疑政党は存在する（cf. Green, 2008）[6]。欧州懐疑政党に投票する有権者のヨーロッパ・アイデンティティがとりわけ低いわけではないというデータからも窺えるように、有権者アイデンティティと反欧州的態度の間にも相関はみられない（Andersen & Evans, 2005）。

欧州懐疑政党のマッピングと従来の政治的「右―左」イデオロギーも関係しない。欧州懐疑政党は左派と右派両極に存在し、表象のされ方も国によって大きく異なっている（Featherstone, 1988）。

以上をまとめると、欧州統合を基点とする争点態度と既存の政党システムの機能のあり方が非整合であると同

図 1　欧州議会選挙（1994 年）における政党タイプ／国別得票率（合計）



【出典】Taggart, 1998: 374

時に、他方ではそのナショナルな政党システムのパターンや様式に強く影響されていることが理解できる。

本稿で度々参照するジジェビアック／タガートは、欧州統合に対する政治的態度一般を、①否定主義者（rejectionist：EU拡大やEU制度への参加に反対）、②修正主義者（revisionist：委譲された国家主権の復活の要求）、③ミニマリスト（minimalist：現状維持の志向とEU権限拡大に反対）、④漸増主義者（gradualist：慎重なEUの権限増大に賛成）、⑤改革主義者（reformist：EUの権限増大に賛成）、⑥マキシマリスト（maximalist：さらなる統合の要求）の六つに分類している（Szczerbiak & Taggart, 2008c）。しかし、この態度はどのような国の、どのような政党にも可変的に観察されるものであるから、これでもって「欧州懐疑主義」を計測することはできない。

このように、「欧州懐疑政党」の定義には、内在的な困難さが付随する。仮に、欧州統合に対して何らかの留保をとることを欧州懐疑主義の定義とする

ならば、そこには九〇年代以降に生まれた単一争点型の政党や急進主義的な政党の多くが含まれてしまう。さらに、政権与党が特定のＥＵ政策を打ち出したとして、野党がこれに反対する場合にも、これを欧州懐疑政党に含めなければならなくなる。

従って、「欧州懐疑政党」の本質主義的説明に固執するのではなく、既存の政党／政党システムにおいて欧州統合要因がどう機能しているのかを精査した上で、外延的に欧州会議政党の位置付けを試みることが必要になってくる。そのためには欧州統合と、ナショナル・レベルの政党システムを構造化させるクリーヴィッジとの関係を精査しなければならない。

2　欧州統合と「クリーヴィッジ」

欧州統合とナショナル・レベルの政党政治というテーマに早くから取り組んだヒックス／ロードは、欧州統合が歴史的な「政党ファミリー（party family）」を圧力にさらし、トランスナショナルな政治的クリーヴィッジを新たに生じさせる可能性を指摘していた（Hix & Lord, 1997: 8-9）。

「クリーヴィッジ」とは、いうまでもなくリプセット／ロッカンによって提起された中央／周辺、国家／教会、土地／産業、所有者／労働者の歴史的な四つの亀裂による政党システムと政党・有権者編成をセットとする概念である（Lipset & Rokkan, 1967）。クリーヴィッジ概念をめぐっては様々な論争が存在するが、[7] 一般的には、①明確に分類される集団が形成され、②その集団の自己認識が存在し、③政治的集団による集団の動員があることを定義としている（Bartolini & Mair, 1990）。もし欧州統合が新たな政治体としての輪郭を持ち、欧州における市民・宗教・産業革命と同じほどのスケールとインパクトを持つのであれば（cf. 白鳥二〇〇八年）、それに伴う

構造化と組織化の可能性の有無を測定するのは当然である。以下に、その肯定論と否定論それぞれの主張を確認する。

2・1　肯定論

マクロな視点から、欧州政治によるクリーヴィッジ変動を指摘するのが、ステファノ・バルトリーニとフィリップ・シュミッターである。前者は、欧州統合の進展と深化は国民国家を形成せしめてきた諸境界（boundaries）の再編を伴うものであるゆえ、これに添った「極化の軸（axe of polarization）」が新たに生じる必然性を説く。バルトリーニは、欧州統合に対する各国政党の態度は、加盟国の国益に規定される「地政学モデル」、国内政治の価値配分に規定される「制度モデル」、左右イデオロギーに規定される「党派モデル」、国内のクリーヴィッジ構造に規定される「起源モデル」の四つでもって規定されると推測する。そして欧州レベルでの政党システム形成の構造的な弱さを指摘しつつ、伝統的なナショナルな政党システムは欧州統合で生じる政治的・文化的・経済的変化とは非適応的であると結論付け、ナショナル・レベルの政党システムの構造的崩壊を指摘している（Bartolini, 2005: 354–355）。

シュミッターは、やはりリプセット／ロッカンのクリーヴィッジ理論を踏まえつつ、より具体的に踏み込んで、ナショナル・レベルでの親欧州政党と反欧州政党の軸が生成する可能性を指摘している（Schmitter, 2000: 69–70）。欧州統合を争点とするこの軸は、イデオロギーの左右軸の両陣営で当初生成されるものの（“2＋2 party system”）、仮にこのクリーヴィッジが解消される方向に向かうならば、やがて欧州統合の是非に添った二大政党制が構築されることになると推測する（“2 party system”）。

こうした分析は、ナショナルな政党間競合での欧州統合争点の肥大化を考えれば、直感的には納得できるもの

である。そもそも、クリージが強調するように、旧来のクリーヴィッジの持続は新たなクリーヴィッジの勃興を妨げるものではなく、それらは重層的なものとして存在し得るからである（Kriesi, 1998）。

2・2　否定論

他方、リプセット／ロッカンの立論を共有しつつ、既存の政党システムの強靭さを指摘する論者も存在する。ピーター・メアーは、リプセット／ロッカンが中央に対する周辺からの抵抗と資源配分をめぐる争いに着目していたことを重視し、中央―周辺の亀裂は欧州統合では制度化されているため、また資源配分についてはその権限が政党政治の領域にはないため、ナショナル・レベルでの争点とはならないとする（Mair, 2005: 8-9）。従って、「ヨーロッパ化」と領土的クリーヴィッジを比較した場合、前者は後者を塗り替えるものではないとする。

また、マークス／ウィルソンは、一九九六年までの各国の政党マニフェストの「専門家調査（expert survey）」データから[8]、社会民主主義、自由主義、キリスト教民主主義、保守主義の歴史的な政党ファミリーの志向性と欧州統合支持に変化はないとしている。そして、前提条件と時間軸によって強弱はあるものの、歴史的に刻印されたクリーヴィッジ構造は継続しているとする（Marks & Wilson, 2000）。

さらに、政党システム内のメカニクスを精査したハームセンは、欧州統合争点が政党間競合で生成する通常の争点に類似していることを指摘し、欧州統合は「非クリーヴィッジ（non-clivage）」だとしている（Harmsen, 2005）。政権与党は欧州統合やEU政治が不可逆的であるため、これを「国内化（domestication）」し、次いで欧州懐疑政党は政権与党に対する批判や追及する争点として欧州統合を利用しようとする、二段階の「吸収」過程が存在するためである。政党が、欧州統合に包括的かつ直接的な反対を表明することは反民主主義的な運動としてスティグマ化される危険性を持ち、さらに既成政党のEU批判は非難の急進化（〝せり上げ現象〟）を生じさせ

表 1　欧州統合と国内政党システムの関係についての仮説

フォーマット	メカニクス	
	浸透	制度化
直接的 （狭義のクリーヴィッジ）	新しい反欧州政党の台頭、既存政党内での反欧州感情の台頭	汎欧州政党連合の創設と確立
間接的 （広義のクリーヴィッジ）	ナショナルな政党間競合空間の圧縮、国内意思決定への拘束、国政選挙での競合空間の切下げ	代表制のオルターナティブ／非政党回路の台頭、国内での「ヨーロッパ」言説の流通

【出典】Mair, 2007a: 157 に基づき加筆修正

るから、こうした争点化のあり方は回避される（cf. Sitter, 2001）。これは通常の「オポジション」のパターンであって、既存の政党システムの構造を変化させるまでには至らない。「ヨーロッパ化」はこと政党政治では限定的な範囲に留まる。こうしてみると欧州懐疑政党に関しても、「欧州統合は他の手段による国内政治」（Marks & Wilson, 2000: 459）の範囲に留まっているといえよう。

欧州統合が政党システムに対して全くインパクトを及ぼさないという立論は、個別的なケースを除けば、ほぼない。だがそのインパクトについては、まず直接的か間接的かで評価は分かれる。そして、「クリーヴィッジ」を、歴史的構造の変化を含む狭義に解釈するのか、政党間競合のパターンや配置に影響を与えるとする広義に解釈するのかによって評価は分かれる（cf. Roger, 2008）。その上で、欧州統合の影響が浸透して何らかの変動をもたらすのか、あるいは制度化されて表出されないままとなるのかは、個別的なケースによるのである（**表 1** 参照）。

このようにしてみると、欧州統合は政党システムそのものに影響を及ぼしているというよりは、政党の機能そのものに作用し、利益表出のあり方を変化させているとしたほうが適当であるように思われる（Balme & Chabanet, 2002）。

従って、次に必要とされる作業は、分析レベルを下げて、欧州懐疑政党が生成してくるプロセスを精査することである。ここでは、欧州統合はナショナルな政治に追従する、通常の政治的争点として扱われることになる。その範囲の中で欧州懐疑政党は始めて分析できる。それはまた、サルトーリやパーネビアンコが強

調したように、政党の適応過程と合理性に着目することにつながるだろう（Sartori, 1968; パーネビアンコ二〇〇五年）。

3　欧州統合のもとでの政党間競合

ある国の政党システムにおいて欧州懐疑政党が存在し、存在したとして、どの程度の支持を集めるのかは、相互に関連する複数の要因が特定できる（cf. Szczerbiak & Taggart, 2008b）。

まず、政党イデオロギーがあげられる。直感的には、国家主権や社会秩序に固執する保守／右派政党、また、左派においては一国社会主義を試み資本主義体制に批判的な社会主義／共産党が欧州統合に批判的となることが推測される。他方、歴史的にトランスナショナルな構造を持つキリスト教民主主義政党は、統合に積極的であることが多い。つまり、政党イデオロギーの強弱や配置でもって、欧州懐疑主義の浸透度や影響力を計ることができる。こうした政党配置の下では、イデオロギーの左右と欧州統合への態度は、逆U字型（“inverted U curve”）となる。例えば、共産党は単一市場という資本主義プロジェクトを、極右政党は主権移譲とナショナル・アイデンティティの脅威を欧州統合に見出す。こうして、中道政党（社民政党、キリ民政党、自由主義政党）が親欧州的である一方、左右両極に近づけば近づくほど欧州懐疑政党の数は増加することになる（Hix & Lord, 1997: Ch.2）。[9]

その理由として、フーグ等は、政党システムで優位な立場を維持できる政党は、あえて欧州懐疑の立場をとる必要性がない一方、逆に劣位にあり与党となるチャンスを得られない周辺政党は、競合関係の再編を狙って、欧州懐疑政党へと傾斜する合理的な理由を持つからだという（Hooghe et al., 2002）。これは、なぜ反システム政党・ポピュリスト政党と呼ばれる政党が、欧州懐疑政党に分類されることが多いのかを説明する、有力な仮説で

ある。

次に、制度的構造を要因として挙げることができる。欧州懐疑政党が、多数派選挙制度の下で有意な政党となるのは難しく、また行政府と立法府との関係によっても政党戦略は変化する。また、時の政府や他の政党の欧州統合に対する態度、その国が統合過程からどの程度利益を得ているのか、例えばＥＵ法の議会での扱われ方やＣＡＰ（共通農業政策）の受益国かどうかなどの変数もあげられる。中には、西ドイツのように当初から欧州統合過程に埋め込まれているため、明確に欧州懐疑の立場が表明しにくい政治的構造を持つ国も存在する（Lees, 2002）[10]。

最後には、当然ながら政党間競合の構造を指摘することができる。二大政党制／多党制なのかといったフォーマットの形式、さらにその国における代表性の機能のあり方や争点創出などのメカニクスの形式によって、欧州懐疑主義の発展のあり方は異なることが予想される。

3・1　政党システムにおける「イデオロギーマップ」

前述のように、欧州懐疑政党の生成と発展の説明には、既存の政党のポジションの特定が不可欠となる。これら政党は、①政党マニフェスト、②党内組織、③政党間競合、④政党―政府関係、⑤トランスナショナルな政党関係の五つの領域でのヨーロッパ化をすでに経験しており（Ladrech, 2002）、欧州統合にどのように対応しているかが、欧州懐疑政党の成否を決める。

先に紹介したマークス／ウィルソンは、欧州統合を起点として政党ポジションがどのように移動するかのロジックについてヒントを提示している（Marks & Wilson, 2000, cf. Hooghe et al., 2002; Marks et al., 2002）。これによると、既存の社民政党は、一国レベルでの社民主義体制の維持が困難になると、それまで欧州統合による単一

市場プロジェクトに抵抗していたのが、統合の進展に伴う諸政策（構造基金、欧州社会憲章、環境政策等）による補完的政策に魅力を感じて、親欧州統合的態度へと傾斜していく。例えばフランスやイタリア、スペインの左派政党は一九五〇年代には超国家統合に懐疑的だったのが、その後、政権交代を経験して結果的に新欧州統合へとポジションをシフトしていった（cf. Griffiths, 1993）。保守政党は、ネオリベラル／国家主権イデオロギーという偏差はあるものの、単一市場競争の側面を重視し、やはり新欧州統合へと帰着する。

そもそも政権与党である場合、超国家的な欧州統合のプロセスからの離脱は、ほぼ不可能に近い。さらに欧州統合は、時間を追うにつれて、その制度的拘束を強めるから（Parsons, 2003）、政権獲得競争に参加しようとする政党が、欧州懐疑政党のままでいることは難しい。

既存の政党が、欧州統合になぜ親和的態度をとるのかについてのもうひとつの有力な議論は、ヒックスによるものである（Hix, 1999）。彼は政党競合空間で、「統合（integration）—独立（independence）」の軸が生じていることを認めつつ、これが全面化しない理由をイデオロギーマップ（“ideological identikit”）を用いて説明している。

このマップは以下のようなものである。まず、各国では統合により有利になるセクターと不利になるセクターが存在する一方、政党の伝統的な支持基盤は「統合—独立」の軸にまたがって形成されている。例えば、社民政党は大企業ホワイトカラーおよび国有部門／国内企業従業員を支持基盤とし、また保守政党はグローバル企業経営者だけでなく、自営業者にも依存する。さらに自由主義政党は、大企業従業員やグローバル従業員を票田とする[11]。従って、従来の左右対立軸に沿った社会的規制のような「階層内連合」は可能ではあっても、これは「統合—独立軸」で機能せず、逆に「統合—独立軸」での「セクター内連合」は可能となるが、これは左右対立軸では機能しない。そして、既存政党が特定セクターのみに依存することは戦略的敗北を意味するため、左右対立軸を

表2　欧州統合の政党システムへの影響

レベル	問題	直接的影響	間接的影響
政治システム	政党の役割	—	ナショナルな政治資源の削減 利益代表回路の均衡の変化
政党システム	フォーマットの変化 有権者編成 競合のパターン	新党結成 有権者の再編成 新しい争点の次元	既存政党による推進
政党	トランスナショナル組織との協調	水平的協調／スープラナショナル連合の困難	—
政党組織内	派閥／中央周縁の分化	分党	組織内の垂直的秩序の緩和

【出典】Bartolini, 2005: 359 に基づいて作成

優先した形で「EU政治空間」が形成されるのである。すなわち、「統合—独立軸」で「独立」次元に位置する社会階層は相対的に少ないため、左右両極の欧州懐疑政党を除いて、既存政党は新欧州的になっていくことになる。つまり、欧州統合争点は、国内の選挙市場では政党にとって「ペイ」しない争点なのである。

計量分析でも、政党は「統合—対立軸」ではなく、既存の有権者分布に従って配置しており、それも、政権に近い政党であればあるほどに、その程度が強いとされる（Mattila & Raunio, 2006）。

以上の立論は、既存政党が構造的な形で新欧州統合的立場に固定化されるメカニズムが存在すること、また欧州統合でもって新たな政党間競合の余地があるにしても、これに対応するにはコストが高く、仮に適応的なポジションをとった場合、政党は選挙上の大きなリスクを抱えることを示唆している。端的にいえば、欧州統合は「統合—独立軸」を生起させるものの、政党組織は「左右対立軸」内でしか競合を行うことができず、これが政党デモクラシーでの「ねじれ」を生じさせているのである（**表2**参照[12]）。というのも、実際の有権者態度としては「統合—独立軸」が明確に存在しているにも拘わらず——そしてこれは左右対立軸と相関性を持たない——、これに対する既成政党の政治的準備（political readiness）がない状

態を帰結させているためである（Ejik & Franklin, 2004）。

3・2　政治的機会構造による懐疑主義の表出

欧州懐疑政党の存在は、以上のような政党システムの構造に拠っていると言い換えることもできる。すなわち、既存政党は欧州統合争点を有意な形で扱うことができず、また新たな競合的次元を切り拓くことができない。反対に、欧州懐疑政党は、そこに新たなニッチマーケットを見出し、いわばエリートに対する「挑戦者（contenders）」としての地位を得ることが可能になる。[13]

欧州統合争点は、政治的な機会構造を提供しているともいえる。「政治的機会構造」とは、周知のようにアイジンガーやティリー、タローといった論者によって先鞭が付けられた概念であり、マックアダムの定義に従えば、(1)政治システムの開放性、(2)エリートの統治連合パターンの変化の有無、(3)エリートの統治連合の有無、(4)国家の抑圧能力の四つを要因として、特定集団の権力へのアクセス機会が存在するのかを特定するものである（McAdam, 1996; cf. Kitchelt, 1986）。

欧州懐疑政党の存在にとって、最も決定的な環境的／制度的要因は選挙制度である。当然、比例代表制（あるいは比例度の高い混合制）を採用している国では欧州懐疑政党の生成と発展の可能性が高いと推測される。これに加えて、国民投票を機会構造に数えることもできるだろう（Lees, 2008）。オランダやアイルランド、また後にみるフランスのように、EU条約の国民投票は、欧州懐疑運動が世論に働きかける大きなきっかけを提供した。

もっとも、多数制をとる英国やフランスにも欧州懐疑政党は存在する。逆に、比例制をとるアイルランドやノルウェーに有意な欧州懐疑政党は存在しない。また、フランスでは国民投票実施の頻度は高いものの、英国ではほとんどなく、逆にアイルランドやイタリアのように国民投票の頻度が高くとも、これが欧州懐疑政党の生成に

は必ずしも結びつかない国もある。つまり、「政党が複雑な現象であって、制度的環境を考慮に入れても欧州統合に対するポジションがどのように決まるのかを特定するのは難しい」（Lees, 2008: 49）。従って、環境的／制度的要因ではなく、政党システムを形成する質的な機会構造を考慮する必要が出てくる。以下に、英仏の具体的事例をみてみよう。

4　仏英における欧州懐疑政党の展開と生成

ジジェビアック／タガート編によるＥＵ加盟一八カ国の欧州懐疑政党に関するサーヴェイでは、各国の欧州統合をめぐる政党間競合パターンが分類されている（Szczerbiak & Taggart, 2008a, ch. 20）。すなわち、①主要政党が原則欧州統合に積極的であり、従って主流派の間では争点とならない「限定的な異議申立て」（原加盟国の多く）、②政権に就く主要政党が欧州統合を争点としている「開かれた異議申立て」（北欧諸国の多く）、③欧州統合争点が政党間競合に全く影響を与えない「封じ込められた異議申立て」（新規加盟国の多く）の三つである。

この分類に従えば、フランスは①「限定的な異議申立て」が観察され、英国は②「開かれた異議申立て」が観察される国である。両国には、ジジェビアック／タガートがさらに分類した「ソフトな欧州懐疑政党」と「ハードな欧州懐疑政党」の立場をとる、二種類の政党が混在している。前者は欧州／ＥＵそのものに異議申し立てるのではなく、特定の政策領域に対するオルターナティブを「異議申し立てのレトリック」（ibid.: 8）として用いる政党である。後者は、しばし単一争点型の政党として、欧州統合／ＥＵプロジェクトそのものの破産や脱退を主張する政党である。以下にみるように、仏共産党やＣＰＮＴ、英保守党や緑の党は「ソフトな欧集懐疑政党」、他方で仏ＭＤＣやＲＰＦ、英ＵＫＩＰやＢＮＰは「ハードな欧州懐疑政党」に分類されるだろう。

4・1　フランスの事例[14]

フランスは、かつてのようなゴーリズムや左派勢力による反欧州主義はほぼ消滅し、少なくとも主要政党による全面的な欧州懐疑はみられなくなった。

欧州統合に対する批判的態度を堅持していた政党ファミリーは保守政党だが、これは「自由主義的・ヨーロッパ主義的右派」と「本来的なドゴール主義の正嫡」から構成されていた（レモン一九九五年；cf. Sauger, 2005）。一九六二年のドゴール大統領のＥＥＣ（欧州経済共同体）批判に抗議して中道ＭＲＰの閣僚五名が辞職、また七〇年代にはジスカール＝デスタン大統領と対立するドゴール派のシラク元首相が、欧州議会の直接選挙に反対して大統領与党を「外国の政党」と非難したように、統合をめぐって保守陣営は一枚岩ではなかった。また、左派陣営の中の主要政党となった社会党も、五〇年代の欧州防衛共同体（ＥＤＣ）批准の際に党内で路線対立を経験し、また七〇年代の野党期には欧州統合の性格をめぐって様々な内紛を抱えたように、欧州統合と必ずしも親和的でなかった（Delwitt, 1995）。

もっとも、一九八〇年代から九〇年代にかけて、左派ミッテラン、続く保守シラク大統領ともに、欧州統合を争点化することはしなかった（Grunberg, 2008）。これは、共産党や極右を除く左右両派のエスタブリッシュ政党が与党経験とともに欧州統合支持へと傾き、欧州統合が八〇年代後半から政党間の「仕切られたコンセンサス」となったことの証しでもあった（吉田二〇〇八年）。主要政党の新欧州統合的態度への傾斜と、党内の欧州懐疑派の駆逐は、九〇年代の左右両陣営での欧州懐疑政党の誕生を説明する前提条件となる。

フランスの政党制には、極左トロツキスト政党（旧『労働者の戦い（ＬＯ）』、『共産主義革命連合（ＬＣＲ）』）から極右の国民戦線（ＦＮ）まで、広いレンジにわたるイデオロギー政党が存在するが、欧州懐疑政党として明確

に分類できる政党は、九二年のマーストリヒト条約（TEU）の国民投票を境にして出現した。このいわば「マーストリヒト・モーメント」によって生まれた欧州懐疑政党はこれ以降増加していき、有権者市場でも欧州統合が固有の争点として認知されていくようになる（Andersen & Evans, 2005）[15]。

保守陣営では、一九九四年に中道UDFから分派した「フランスのための運動（MPF）」がいわゆる「主権主義（souverainisme）」政党の嚆矢である[16]。MPFは九四年の欧州議会（EP）候補者リストとして「もうひとつのヨーロッパのための多数派」を提出、極右FNを上回る得票率一二・三三％を獲得した。党首ドヴィリエは、翌九五年の大統領選にも立候補を表明、泡沫候補の中では得票率四・七四％と善戦した。

このMPFの躍進に触発され、九九年には今度はゴーリスト政党RPRから離脱したパスクワが「フランス連合（RPF）」を結成、同年のEP選挙にMPFとの共通リスト「フランスのための連合とヨーロッパの独立」を作成する。パスクワと賛同者のセガンはRPRシラク派とのリーダーシップ争いに敗れ、与党内ではすでにマージナルな地位に追いやられていた。しかし、保守陣営内の主権主義政党の合同の結果、同選挙では与党社会党に次ぐ一三・〇五％の得票率がRPF／MPFに流れ、やはり共通リストで選挙に臨んだRPR―UDFのスコアを上回った[17]。もっとも、MPFとRPFは、二〇〇〇年に党首同士のライバル争いと方針対立に見舞われ、最終的に「主権主義」陣営は分裂してしまう。

左派陣営内でも、九三年に欧州懐疑主義を明確にする「市民の運動（MDC）」が、社会党内左派の派閥を率いていたシュヴェンヌマンを党首として誕生した[18]。もっとも、九四年のEP選でMDCは二・五四％と低迷を余儀なくされた。これは、保守陣営での反システム政党がFN（国民戦線）だけであるのに対して、左派陣営内では共産党に加えてトロツキスト政党や緑の党といった、複数の反エスタブリッシュ政党が存在して、票が分散されたためである（Le Gall, 1994）。MDCは九七年の下院選でも一・〇八％の低得票率に甘んじたものの、同年

表3　フランスにおける欧州懐疑政党

	政党名	大統領選得票率（%、第一回投票、2002年）	EP選（%、2004年）
極左陣営	労働者の闘い（LO）	5.7	2.56
	LCR（共産主義革命連合、現NPA）	4.3	（LO/LCR共通）
	労働者党（PT、旧OCI）	0.5	0.77
左派	共産党（PC）	3.4	5.88
極右	国民戦線（FN）	16.9	9.81
	国民共和運動（MNR、FN分派）	2.3	0.31
主権主義	市民共和運動（旧MDC、社会党分派）	5.3	（社会党共通）
	フランスのための運動（MPF、UDF分派）	–	6.67
	フランスのための連合（RPF、RPR分派）	–	1.70
地域主義	狩猟・漁業・自然と伝統（CPNT）	4.1	1.73

【出典】Grunberg, 2008: 42; 47を基に作成

に発足したジョスパン左派連立政権の一角を共産党とともに占める。エスタブリッシュ政党によって、共産党を含む欧州懐疑政党が「囲い込まれた」ことで左派の欧州懐疑政党は勢いを減じていった（Miller, 2000）。

二〇〇二年大統領選では、FN党首ルペンが決戦投票に進んだが、同選挙での欧州懐疑政党のパフォーマンスは芳しいものではなかった（**表3**参照）。これは、同選挙で犯罪や社会格差が大きな争点となったこと、欧州懐疑政党の争点化が、左右対立軸に引き裂かれてしまったためである（Grunberg, 2008）。欧州統合にまつわる争点として、極右支持者は移民政策を、反対に左派の欧州懐疑政党支持者は社会保障政策を重視したため、双方の争点の乗り入れも実現しなかった。

さて、以上のフランスにおける欧州懐疑政党の生成と発展は、これまでの仮説を支持する。まず欧州懐疑政党は、既存の政党ファミリーないしエスタブリッシュ政党内での覇権争いから生じてきた、という点である。ドヴィリエMPFは、左右両陣営に挟まれ凋落する中道UDFからの脱出を狙い、パスクワRPFは、シラク派の党内覇権が確立しつつあるRPRで周辺化されていたために、新たな対立軸を要していた。また左派陣営のシュヴェンヌマンは一貫して社会党の中道化と親欧州統合への路線転換を非難し続けた人物であったが、そのため

大統領候補適格者（présidentiable）の地位を得られないままだった。

もうひとつは、国民投票とＥＰ選挙がこれら欧州懐疑政党の生成の機会構造を提供したという点である（Hainsworth et al., 2004）。すなわち、第一の局面として、一九九二年のＴＥＵ批准の国民投票が行われたことで、欧州統合を争点とする政治的次元が拓かれることになった。続く第二の局面では、この政治的次元の延長線上に九四年と九九年のＥＰ選が行われ、欧州懐疑政党は一定のスコアを収めることができた。その間、九八年にはアムステルダム条約の議会批准という、もうひとつのモーメントもあった。しかし第三の局面として、欧州統合争点が後景に退いた大統領選では、このサイクルは閉じられることとなった。

この局面の始まりと終わりには、選挙制度も関係している。フランスの大統領選挙および下院選での二回投票制は、極めて票の凝集性が高く戦略的余地が高い一方で、比例代表制で行われるＥＰ選では小規模政党でも一定の票を得ることができる。事実、八〇年代後半のＦＮの躍進は、八四年のＥＰ選挙（一一％）を境にしてのことだった。フランス選挙における、この「アコーディオン効果」（Parodi, 1992）は、欧州懐疑政党にとっての機会構造として作用する。

一九九〇年代にフランスの政党システムで生じていたのは、①既存の左右対立軸が弱体化しつつ、欧州統合や環境問題といった新たな争点群が肥大化し、②これに対応する政党側の供給（主権主義政党や緑の党）がみられるものの、③争点群は独自の政治空間を形成しないで既存の左右対立軸に吸収されるというサイクルである（Sauger, 2005）。

なお、二〇〇五年の欧州憲法条約案の批准に際しては、こうした争点の肥大化に伴って、欧州懐疑政党よりも、野党のエスタブリッシュ政党の困難が確認された（cf. Ivaldi, 2006; Crespy, 2007）。保守陣営は主権主義者の周縁化と大統領政党ＵＭＰの誕生によって条約案への「ウイ」を支持したが、深刻な内紛を抱えたのは社会党だった。

社会党は憲法条約の批准を一般党員の投票によって決定したものの、これに対して党ナンバー2で二〇〇七年大統領選出馬を狙うファビウスが否決を支持、国民投票を前に党は分断された（柳田二〇〇六年）。九二年ＴＥＵおよび九八年アムステルダム条約とは異なり、二〇〇五年の「ノン」のキャンペーンは、ＡＴＴＡＣ（「市民を支援する金融取引課税を求めるアソシエーション」）や極左シンクタンク・コペルニク財団といった市民社会団体が牽引したが、社会党内のリーダーシップ争いの手段として利用されたという点では共通していた。また、社会党執行部は二〇〇九年のＥＰ選で、現政権への批判の手段として選挙を利用するよう支持者に呼びかけた（see *e.g., Le Figaro*, 15 mai 2009）。こうした戦略もまた、「統合―独立軸」が機能することを妨げている要因になっている。

４・２　英国の事例

フランスと異なり、英国は政権与党を含め、親欧州的態度が全面化することはなく、政権が統合に対して常に一定度の留保を課す「やっかいなパートナー（An Awkward Partner）」であり続けている。ジョージは、英国世論は想像以上に欧州統合に積極的であるにも拘わらず、相対的に隔離されている政治空間でのエリートや利益団体の「自己強化的な欧州懐疑サークル」による影響が大きいと指摘している（George, 2000）。また、欧州懐疑政党が党内派閥の一部として生成し、結党以後も相対的にマージナルな位置しか占めることのなかったフランスと異なり、英国は保守党と労働党の一部を含め、二大政党が公的にＥＵに異議を表明するような「開かれた異議申立て」の政党間競合の構造を持っている。

一九七九年に与党に返り咲いた保守党は、サッチャー首相のリーダーシップのもと、単一市場構想に積極的だったものの、他方で八〇年代後半から再浮上した単一通貨構想や「ソーシャル・ヨーロッパ」には一貫して反対

の態度を貫き、これがハウ外相の辞任といった内閣のかく乱要因となり、間接的に九一年のサッチャー辞任へとつながった。後継のメージャー首相は、ＴＥＵ交渉に乗り出し英国を再び「共同体の中心」に押し戻そうとするものの、これは保守党内だけでなく、労働党からの厳しい批判を浴びることになり、再び英国が欧州統合から遠ざかるサイクルを作った。

保守党が、政権の対欧州政策に影響を与えていたのは確かである（Baker et al., 1993）。党内では、メージャーの予想以上に「ブリュージュ・グループ（The Bruges Group）」や「フレッシュ・スタート（“Fresh Start Group”）」といった欧州懐疑派の影響力が強く、欧州懐疑主義は一般党員にも共有されていた（see, Seyd et al., 1994）。結果としてＴＥＵ交渉の過程で、メージャー政権は単一通貨と共通社会政策からのオプトアウトを選択せざるを得なくなる。

一九九二年の総選挙では、欧州統合は大きな争点とはならなかった。しかし、与党は議席の多くを失い、ＴＥＵ条約批准に際して二桁の造反議員を抱え、メージャー保守党政権が親欧州主義に傾斜することは不可能となった。九〇年代前半は、サッチャー政権との差異化戦略として党執行部（およびメージャー個人）による親欧州統合路線と、内閣・党執行部内の欧州懐疑派の路線との間で大きな溝が生まれ、政策は大きく揺れた。これは、「国家主権と資本主義の党」（George, 2000: 29）たる保守党ゆえのジレンマだった。

こうした状況は、九七年のブレア労働党による政権交代で一転する。同政権は、欧州社会憲章の批准といった形で、積極的な欧州政策を一定の留保を付けつつも、展開した。中でも、一九九八年一二月のサンマロ英仏会談でＥＳＤＰ（欧州安全保障防衛政策）創設に合意したことは、政策転換の大きな象徴として捉えられた（鈴木二〇〇八年）。

確かに保守党と比べた場合、労働党議員団間の欧州懐疑色は相対的に薄い。しかし、そのような一般的な特徴

付けには注意を払う必要がある。労働党もまた、戦後アトリー政権時に欧州統合プロジェクトを資本主義の拡大として警戒し、六〇年代の労働党党首ゲイッケルは、マクミラン保守党政権のＥＥＣ加盟方針を激しく非難していた。この態度が転換するのは、ウィルソン労働党政権が誕生し、その下で加盟交渉が行われるようになってからのことである。しかし、同党は一九八三年選挙で遠心的競合を選択した結果、欧州統合との距離を再び拡大させる。内部に欧州懐疑派（例えば“Tribune Group”）を抱えつつも、親欧州の方針が確固としたものとなるのは、党内改革と軌を一にする八〇年代後半に入ってからのことである（Forster, 2002b: ch. 5）。これとは反対に、与党保守党が労働党の親欧州的態度を今度は非難するようになる。つまり英国の場合、欧州統合をめぐる態度は、オポジションであるかどうかによって、相対的に規定されている面が大きいといえる。

こうした構図は、二大政党制を支える選挙制度と政党システムに原因を求めることができる（Sprierring, 2004）。すなわち、敵対の政治によって欧州統合をめぐる争点は容易にアジェンダ化されるが、他方で中道化の誘引が働き、小規模政党が介在する余地の低い二大政党制のもとではこれが正面から扱われることはなく、従って欧州懐疑派は党内でマージナルな地位に追いやられつつも、争点そのものは常に表面化しているという、ある種の均衡状態がもたらされるのである。[19]

この均衡状態は、選挙キャンペーン最中にも観察された。一九九七年と二〇〇一年の総選挙では、以下にみるような「ハードな欧州懐疑政党」による争点化の努力が行われたために、保守党内は組織の一体性を維持するのに苦慮することになった。二大政党の内部それぞれに欧州懐疑派を抱えていることから、争点化は内部分裂の圧力をもたらす。従って、党エリートは言説上では欧州懐疑主義を表明しつつ、実際には欧州争点を管理する方向を模索し、それが再度党内紛争をもたらすという悪循環を生じさせた（Forster, 2002a）。[20]

英独立党（ＵＫＩＰ）や国民投票党（Referendum Party）、社会労働党（ＳＬＰ）といった、小規模ではあるが

表４　英国における欧州懐疑政党

政党名	下院選得票率（%、2001 年）	欧州議会選挙得票率（%、2004 年）
保守党	32.7	26.7
UKIP	1.5	16.1
緑の党	0.7	6.3
スコットランド社会党	0.3	0.3
社会主義同盟	0.2	–
社会労働党	0.2	–
イギリス国民党	0.2	4.9

【出典】Baker et al., 2008: 108 を基に作成

強力な欧州懐疑政党が出現するのは、九〇年代のことである。[21] こうした政党・運動は、英国のＥＵ脱退を正面から唱える「ハードな欧州懐疑」政党である（Baker et al., 2008）。中でも、九四年のＥＰ選でフランスのＭＰＦと共同キャンペーンを張った国民投票党は、一九九七年総選挙で得票率三・一％と、英戦後政治史の中で小政党としてはそれまでの最高得票率を得た。ＵＫＩＰも、二〇〇四年のＥＰ選挙で同一六％と、自由民主党を凌ぐパフォーマンスをみせ、〇九年のＥＰ選でも既存政党の地位を脅かすまでになった（see,e.g. *The Times*, 13 May 2009）（**表４**参照）。このＵＫＩＰの躍進は、一九九九年からＥＰ選が比例代表制となったこと、ニューレイバーの親欧州的立場、さらに保守党の中道化などに求められる（Tournier-Sol, 2007）。

なお、欧州懐疑政党に通常分類される地域主義政党のＳＮＰやプライドカムリは、もともと四〇―五〇年代には親欧州統合の政党だった。七〇年代に入って方針転換したのは英ＥＥＣ加盟に反対することで、エスタブリッシュ政党との差異化を図るためであった。この態度は九〇年代に入って再び転換、地方自律の手段としてＥＵが位置づけられるようになる（Mitchell, 1998）。従って、地域主義政党の欧州懐疑主義は、極めて道具主義的なものであるといえるだろう。

フランスと同様、英国においても、政党間争点としての欧州統合は、既存の左右対立軸の中に吸収されてきたことがわかる。それは、両党内の欧州懐

疑派の強弱、また政権与党であるかオポジションであるかに規定されているといえる。

4・3 小括

フランスと英国の二つの事例を通じて確認できるのは、政党政治で欧州統合が争点化されるのは、政治エリートや欧州懐疑政党によって利得の最大化が可能だと見込まれる場合に限定されている点である。

この現象は、まず党組織内の次元で観察することができる。欧州統合は、フランスの保守政党／社会党内におけるリーダーシップ争いに従属する形で争点化され、また英国の場合においては特定のリーダーシップのもと、党運営に支障のない範囲で処理される。こうした党内組織の次元における欧州懐疑主義が、政党間競合に影響を与える。この第一の次元は、また、党が政権与党であるか否かによっても影響される。

次に、エスタブリッシュ政党に対抗するいわゆる「ハードな欧州懐疑政党」が形成する第二の次元も指摘できる。このいわば純粋な欧州懐疑政党は、エスタブリッシュ政党内の反対派（dissident）によって率いられる場合が多く、また市民社会の欧州懐疑主義派との連携によって強化されていくケースもある。その成功の度合いは世論の動向や国民投票や選挙制度などの、政治的機会構造に左右されるところが大きい。

しかし、表面化した欧州統合争点は、エスタブリッシュ政党によって形成される既存の対立軸である第三の次元によって、吸収されるようになる。この次元のメカニズムは二つの局面に分化することができる。第一は、既存のイデオロギーマップと有権者市場の構造とエスタブリッシュ政党の側による争点管理の局面であり、第二は保守の欧州懐疑政党である場合には「主権」や「ナショナル・アイデンティティ」、また左派の場合には「再分配」の問題を扱って、既存のイデオロギーマップが利用される局面である。こうした戦略は一定度の支持を集めるものの、政党システムの変化にまでは至らない（Hooghe & Marks, 2008）。つまり、「EUは、支配的な政党が

カルテル内で差異化を図る争点として利用できないがゆえに、他の政党が自らのアイデンティティを形成する争点として利用されている」（Taggart, 1998: 382）のである。

先述のように、メアーは欧州統合が政党のフォーマットに影響を与えないまでも、その競合メカニズムが変化し得ることを指摘している（Mair, 2001）。すなわち、ナショナルな政党は欧州議会という、未だ立法機能と執政府の選出機能に相対的に劣る機関にしか直接的に関与せず、欧州統合が亀裂をもたらしうる争点であるにも拘わらず、政党間競合の次元が「圧縮（hollowing out）」され、国内政治から欧州統合争点が排除されるメカニズムである。これは、欧州統合によってナショナル・レベルでの政党政治が「脱政治化」されていくプロセスであるともいえる。

5　おわりに——欧州デモクラシーにおける政党政治

本稿は、欧州統合のプロセスが政党組織内および政党システムにとっての大きな負荷要因となっているにも拘わらず、既存の政党布置と競合のパターンに強く影響されているメカニズムをみてきた。

欧州懐疑政党への着目は、有権者の多くの利害がEUによって影響されていると感じるというミクロ・レベルでの変動が、直接的に政党・政党システムへと伝達されないという事実を明るみに出すことをも意味している（Bartolini, 2001: 35）。こうした政党政治の機能不全の現象は、欧州統合過程だけに起因するのではないが、促進要因のひとつになっていることは確かである。「政治なき政策（Policy without Politics）」（Schmidt, 2005）が支配的であるEU政治空間において、欧州統合は政党政治の空洞化を、構造的に後押しする。そして欧州懐疑主義はこのような「不満に巣くい」、そして不満が「排除に巣くう」ことになる（Mair, 2007a: 165）。

欧州統合過程は、もはや政党ではなく、利益団体や討議民主主義を基盤にした利益代表の経路を優先している。利益団体による多元主義は、政党政治と比較して当事者の利害が明確かつ直接的であり、また利益のインプットと評価が比較的容易であるためだ（Richardson, 1995）。そのため、EUは欧州委員会を中心に、利益団体の組織化と協力による政策形成を重視してきた（Richardson, 1996）。行政によって支えられるEU政治空間では、特定の専門知識や業界との協調が不可欠となり、アメリカの政策形成にイメージされる「擬似多元主義（quasi pluralism）」の様相さえ呈するようになった（Schmidt, 1999）。

政党組織のとりわけエリートもまた、統合の争点化に消極的である。EUの意思決定は、政党政治や国内議会から隔離されたアリーナで下され、かつ政府間の合意事項を事後に覆すには政治的コストがかかるためである（Raunio, 2002）。他方で政党エリートは、トランスナショナルな組織間協力と情報交換によって、コミュニケーションの回路を多元化し、利得と権力を得ることができる（Johansson, 2002; Poguntke et al., 2007）。これは、政党支部や一般党員を迂回して政策形成を行い、また党執行部と専門家によるアジェンダセッティング能力を拡大させる方向で党組織が運営されることを意味する。トマセン／シュミットの言葉を借りれば、エリートと一般有権者は「全く異なるヨーロッパ世界に住んでいる」のである（Thomassen & Schmitt, 1997: 181）。以上の現象とエリート戦略は、利益集約のコストを漸減させ、エリートと党員の一体性を反故にして、政党政治の空洞化に拍車をかける。

並行して、欧州委員会は、政党デモクラシーとは異なる形での公共空間を編成しようとしている。例えば欧州委員会は、一九九九年から九カ月にわたる欧州市民社会の（自薦を含む）代表者および各利益団体、各国シンクタンクとのコンサルテーションを開始し、「ガバナンス白書」（二〇〇一年）を作成した。九〇年代にEUは、様々な市民団体・アクターを巻き込みながら、参加民主主義の様式を色濃くしていった（Weisbein, 2001; 安江二

〇〇七年：第7章）。

注意したいのは、こうした「熟議／討議」の過程は政党組織の内部でも再現され、政党が、態度決定や党首選出に際して党員の意見をより直接的かつ限定的に反映させるようにし、討議民主主義の実践によって正統性を維持しようとしてきたことだ（Budge, 2000）。こうした手法は欧州統合にまつわる争点でも観察することができる。先にみたように、例えばフランス社会党は二〇〇四年一二月の党員投票によって欧州憲法条約案への賛否を問い、過半数の支持をもって党の方針決定とした。

こうした意思決定と政策形成の様式は、スカロウのいうような「非党派的な支持者（“non-enrolled supporters”）」に重きを置かざるを得ない（Scarrow, 1994）。しかし、これまで強調したように、こと欧州統合争点に関しては、内部で表明される欧州懐疑主義は既存の政党政治のメカニズムの壁に阻まれてしまうという構造的限界を抱える。

各国政党のマニフェストの内容は、欧州統合の進展とともに収斂傾向にあることがわかっている（Pennings, 2006）。また、EUの権限が拡大している政策領域で政党マニフェストの政策の幅はさらに縮小する傾向にある（Dorussen & Nanou, 2006）。

このように、一方では欧州機制の政策形成のあり方、他方では政党の現代的な変容の二つによって、欧州統合過程は、従来の政党政治のあり方を根本から変容させようとしている（Roger, 2007; 2009）。ここから、政党政治と代議制民主主義の再定義が求められているとさえいえるかもしれない。

「勝者」と「敗者」を生み出すグローバル化があっても、ナショナル・レベルの政治空間は、依然として既存の左右対立軸でその過程を吸収しようとしている（Kriesi et al., 2006）。こうした構図は「脱政治化」される欧州統合過程でも再現されている。ここに、欧州懐疑政党の可能性と限界がある。まず、欧州懐疑政党が展開する政

治のパラメーターは飽くまでも既存の政党システムと大政党によって定義される。他方で、欧州統合はいわば「隠された争点」として、常に争点化される可能性を持ち、政治的動員のためのシンボルとして利用される余地を残している。この大きな対立軸の行方がどのように編成されるのか――その行方に「欧州のデモクラシーは政党デモクラシーである」とする言説の真偽はかかっているといえるだろう。

（1）本稿で繰り返し使われることになる「政党システム」とは、「政党間競合から生まれる相互作用のシステム」のことであり、「政党相互の関連性や、各政党がどの程度他の政党の関数であるのか、他の政党にどのように対応するのか」を規定するという、サルトーリの古典的定義に拠る（サルトーリ一九九二年：七六頁）。

（2）もちろん、政治学は「生成されつつあるものについての知識」（マンハイム一九五二年：一一頁）であると同時に、他方で政体としてのＥＵは「形成途上」（Mair, 2007b: 17）にある。従って、本報告は暫定的な観察に過ぎない。

（3）「欧州懐疑主義」は政党に限られるものではなく、広く加盟各国の政治社会に存在する態度といえるが、本稿では政党の欧州懐疑主義に限定している。なお、欧州懐疑政党をアクターとした場合、ナショナル・レベルにおける親／反欧州、さらにヨーロッパ・レベル（欧州議会）における親／反欧州の四つの態度に分類することができるが、本稿では紙幅の関係から、前者の政党政治の分析に限定したい。また、中東欧の新規加盟国での欧州懐疑政党について触れることができない。同諸国において、フーグはＧＡＬ（Green/Alternative/Libertarian）とＴＡＮ（Traditional/Authoritarian/Nationalist）という二つのクリーヴィッジがイデオロギーの左右次元と同等の優位性を持つと説明している。Hooghe et al., 2002; Marks et al., 2006 を参照。最近の動向については、差当たり Pridham, 2008, Henderson, 2008 を参照。

（4）See e.g. "Libertas to seek a Euro majority," *The Sunday Times*, December 13, 2008. Libertas 運動については二〇〇八年に発足した組織ということもあり、ここでは十分な考察の対象とできない。

（5）欧州統合と政党という問題群にあって、トランスナショナル（ヨーロッパ）レベルにおける政党組織の発展と政党政治についての研究は、ナショナル・レベルの研究と対をなしてきた。超国家的な政党間協力という視点の先駆け

として Pridham & Pridham, 1981、代表的なものとして Hanley, 2008; Hix & Lord, 1997 を参照。もっともこうした研究アジェンダはまた、国内政治から欧州政治への研究対象の移行、さらに（特に英国で顕著な）親／反欧州の言説の形成という学界エコロジーを部分的に反映しているといえる。

(6) 例えばユーロバロメーター調査では、懐疑派の多い英国において有意な欧州懐疑政党は存在せず、逆に懐疑派が多いとはいえないフランスで欧州懐疑政党が存在している。但しこれは政党組織を単位とした場合であることに注意。

(7) おおまかに言って、クリーヴィッジが歴史的／複層的なものなのか、時代的／単層的なものなのか、という点で議論は分化する。詳細については、Zuckerman, 1975, Flora, 1999; Knutsen, 2008 などを参照。

(8) Ray, Leonard, 1999 のデータセットによる（http://www.lsu.edu/faculty/lray2/data/data.html）。

(9) 「逆U字型」の政党配置は、中東欧諸国の事例にも当てはまるとされる。See, Rovny, 2004.

(10) こうした中でも、一九九二年のマーストリヒト条約批准の際に、ＦＤＰのブルナー（Manfred Brunner）による連邦裁判所への提訴は、ドイツの政治史上で数少ない欧州懐疑のモーメントだったといえるかもしれない。詳細については Wieland, 1994; MacCormick, 1995 を参照。

(11) ヒックスは、社会セクターとして農業部門、「ユーロチャンピオン」企業、公共部門、グローバル製造業、国内製造業、金融部門のセクターにおける、労働者、従業員（管理職）、所有者の階層を挙げている。従ってナショナル政治には、六セクター×三階層＝一八の有権者市場が存在しているということになる。See, Hix, 1999: 77.

(12) もっとも、例えば構造基金のように下位政府レベルで展開される再分配政策では左右対立軸が機能することが証明されている。See, Kemmerling & Bodenstein, 2006.

(13) 「挑戦者」は、多元主義理論を批判する文脈で社会抗議運動論を展開したギャムソンが提起した概念である。See, Gamson, 1975.

(14) 本節の詳細は吉田二〇〇三年、またフランス政治における欧州懐疑主義についての包括的な説明として Benôit, 2007 を参照。

(15) こうした初期条件の変化に加えて、九〇年代初頭の不況とユーロ導入に際しての財政規律などによる世論の親欧州的態度の降下も要因として挙げられるだろう（Milner, 2000）。

(16) 「主権主義（souverainisme）」とは九〇年代以降、欧州統合に反対して広く国家主権の擁護を訴える政治的態度のフランスでの一般的名詞であり、本報告で用いる「欧州懐疑主義」と互換可能な概念である。See, Le Boulay, 2008.

(17) 九九年のＥＰ選は、このほか小規模欧州懐疑政党の得票率も合わせれば、計四〇％が反エスタブリッシュ政党に流れることになった。

(18) シュヴェンヌマンおよびＭＤＣについては畑山二〇〇四年、吉田二〇〇四年を参照。

(19) 他方、欧州統合のみを問題とするシングルイシュー政党は生存しにくいため、欧州懐疑派にとっては二大政党の内側から影響力を及ぼそうとするインセンティブが働くことになり、これが保守党・労働党双方に欧州懐疑派が継続してきた理由といえる。

(20) 九九年には、完全少数派となった労働党内の欧州懐疑派が、保守党の一部と連携し、「新欧州運動（New Europe Movement）」を立ち上げるなど、党派横断的な欧州懐疑主義も出現した。

(21) これには、九九年のＥＰ選から北アイルランドを除いて比例代表制が導入されるといった制度的要因も起因しているだろう。

参考文献

Andersen, Robert and Jocelyn E.J. Evans, 2005. "Identifying Europe? The Role and Dynamics of a European Cleavage," in *Politique Européenne*, no.16.

Baker, David, Andrew Gamble and Steve Ludlam, 1993, "1846...1906...1996? Conservative Splits and European Integration," in *Political Quarterly*, vol. 64, no.4.

———, ———, Nick Randall and David Seawright, 2008. "Euroscepticism in the British Party System: A Source of Fascination, Peplexity, and Sometimes Frustrations," in Szczerbiak, Aleks and Paul Taggart, (eds.), *Opposing Europe? The Comparative Politics of Euroscepticism*, vol. 1, Oxford: Oxford University Press.

Balme, Richard et Didier Chabanet, 2002. "Introduction: Action Collective et Gouvernance de l'Union Eu-

ropéenne," in Do. et al., (eds.) *l'Action Collective en Europe*, Paris: Presses de Scinces Po.

Bartolini, Stefano, 2001. "La Structure des Clivages Nationaux et la Question de l'Intégration dans l'Union Européenne," in *Politique Européenne*, vol. 4.

———, 2005. *Restructuring Europe. Centre Formation, system Building and political structuring between the nation-state and the European Union*, Oxford: Oxford University Press.

———, and Peter Mair, 1990, *Identity, Competition and Electoral Availability: The Stabilization of European Electorates 1885-1985*, Cambridge: Cambridge University Press.

Benôit, Bertrand, 2007. *Social-Nationalism. An Anatomy of French Eurosceptism*, London: Ashgate.

Budge, Ian, 2000. "Deliberative Democracy versus Direct Democracy-plus Political Parties!," in Michael Saward (ed.), *Democratic Innovation. Deliberation, Representation and Association*, London: Routledge.

Cini, Michelle, 2002. *European Union Politics*, Oxford: Oxford University Press.

Crespy, Amandine, 2007. "La Cristallisation des Résistances de Gauche à l'Intégration Européenne : les Logiques de Mobilisation dans la Campagne Référendaire Française de 2005," in *Revue Internationale de Politique Comparée*, vol. 15, no. 4.

Delwitt, Pascal, 1995. *Les Partis Socialistes et l'Intégration Européenne*, Bruxelles: Editions de l'Université Libre de Bruxelles.

Dorussen, Han & Kyriaki Nanou, 2006. "European Integration, Intergovernmental Bargaining and Convergence of Party Programmes," in *European Union Politics*, vol. 7, no. 2.

Ejik, Cees van der and Mark N. Franklin, 2004. "Potential for Contention on European Matters at National Elections in Europe," in Gary Marks and Marco R. Steenbergen, (eds.), *European Integration and Political Conflict*, Cambridge: Cambridge University Press.

Featherstone, Kevin, 1988. *Socialist Parties and the European Integration*, Manchester: Manchester University Press.

Flora, Peter, 1999. "Introduction and Interpretation," in Do. Et al. (eds.), *State Formation, Nation-Buiding and Mass Politics in Europe. The Theory of Stein Rokkan*, Oxford: Oxford University Press.

Forster, Anthony, 2002a. "Anti-Europeans, Anti-Marketters, and Eurosceptics: The Evolution and Influence of Labour and Consevative Oppositon to Europe," in *Political Quarterly*, vol. 73, no. 3.

————, 2002b, *Euroscptism in Contemporary British Politics. Opposition to Europe in the British Conservative and Labour since 1945*, London: Routledge.

Gaffney, John, 1996. "Introduction," in Do., (ed.) *Political Parties and the European Union*, London: Routledge.

Gamson, William, E., 1975. *The Strategy of Social Protest*, Homewood: Dorsey Press.

George, Stephen, 2000. "Britain: Anatomy of a Eurosceptic State," in *European Integration*, vol. 22.

Green, David Michael, 2008. "Who are "The Europeans" ?" in *EUSA Review*, summer 2008.

Grunberg, Gérard, 2008. "Eurosceptism in France, 1992-2002," in Szczerbiak, Aleks and Paul Taggart, (eds.), *Opposing Europe? The Comparative Politics of Eurosceptism*, vol. 1, Oxford: Oxford University Press.

Griffifths, Richard, T., 1993. *Socialist Parties and the question of Europe in 1950's*, Leiden: EJ Brill.

Haas, Ernst, B, 1958. *The Uniting of Europe: Political, Social, and Economic Forces, 1950-1957*, Stanford: Stanford University Press.

Hainsworth, Paul, Carolyn O'brien and Paul Mitchell, 2004. "Defending The Nation: The Politics of Eurosceptism on the French Right," in Robert Harmsen and Menno Spiering (eds.), *Eurosceptism. Party Politics, National Identity and European Integration*, Amsterdam: Editions Rodopu B.V.

Hanley, David, 2008. *Beyond the Nation State. Parties in the Era of European Integration*. London: Palgrave.

Harmesen, Robert, 2005. "L'Europe et les Partis Politiques Nationaux: Les Leçons d'un Non-Clivage," in *Revue Internationale de Politique Comparée*, vol. 12, no. 1.

Henderson, Karen, 2008. "Exceptionalism or Convergence? Eurosceptism and Party System in Central and Eastern Europe," in Szczerbiak, Aleks and Paul Taggart (eds.), *Opposing Europe? The Comparative Politics of*

Eurosceptism, vol. 1, Oxford: Oxford University Press.

Hix, Simon,1999. "Dimensions and alignments in European Union Politics: Cognitive Constraint and Partisan Responses," in *European Journal of Political Research*, vol. 35

——— and Christopher Lord, 1997. *Political Parties in the European Union*, London: Macmillan.

Hooghe, Liesbet, Gary Marks and Carole J. Wilson, 2002. "Does left/right structure party positions on European Integration?," in *Comparative Political Studies*, vol. 35, no. 8.

——— and Gary Marks, 2008. "A Postfunctionalist Theory of European Integration: From Permissive Consensus to Constraining Dissensus," in *British Journal of Political Science*, vol. 39.

Ivaldi, Gilles, 2006. "Beyond France's 2005 Referundum on the European Constitutional Treaty: Second-Order Model, Anti-Establishment Attitudes and the End of the Alternative European Utopia," in *West European Politics*, vol. 3, no. 3.

Johansson, Karl Magunus, 2002. "Party Elites in Multilevel Europe: The Christian Democrats and the Single European Act," in *Party Politics*, vol. 8. no. 4.

Kemmerling, Achim and Thilo Bodenstein, 2006. "Partisan Politics in Regional Redistribution," in *European Union Politics*, vol. 7, no. 3.

Kitchelt, Herbert, 1986. "Political Opportunity Structures and Political Protest: Anti-Nuclear Movements in Four Democracies," in *British Journal of Political Science*, vol. 16.

Knutsen, Oddbjørn, 2008. *Class Voting in Western Europe. Comparative Longitudinal Study*, London: Rowman & Littlefield.

Kriesi, Hanspeter, 1998. "The Transformation of Cleavage Politics," in *European Journal of Political Research*, vol. 33.

———, Edward Grande, Romain Lachat, Martin Dolezal, Simon Bornshier, and Thimotheos Frey, 2006. "Globalization and the Transformation of the National Political Space: Six European Countries Compared," in

European Journal of Political Research, vol. 45.
Ladrech, Robert, 2002. "Europeanization and Political Parties: Towards a Framework for Analysis," in *Party Politics*, vol. 4, no. 8
Le Boulay, Morgane, 2008. "La Fabrication d'un Label Usages du Terme"Eurosceptisme" en France et en Allemagne," in Laure Neumayer et al. (eds.), *L'Europe Contestée. Espaces et Enjeux des Positionnemants contre l'Intégration Européenne*, Paris: Michel Houdriard Editeur.
Leconte, Cécile, 2005. *L'Europe face au Défi Populisite*, Paris: PUF.
Lees, Charles, 2002. "'Dark Matter': Institutional Constraints and the Failure of Party-based Euroscepticism in Germany," in *Political Studies*, vol. 50, no. 2.
————, 2008. "Political Opportunity Structure of Eurosceptism," in Szczerbiak, Aleks and Paul Taggart, (eds.), *Opposing Europe? The Comparative Politics of Eurosceptism*, vol. 2, Oxford: Oxford University Press.
Le Gall, Gérard, 1994. "Européenne 1994," in *Revue Politique et Parlementaire*, no. 971.
Lipset, Seymour Martin, and Stein Rokkan, 1967. "Cleavage Structures, Party Systems, and Voter Alignments: An Introduction," in Do. (eds.), *Party Systems and Voter Alignments: Cross-National Perspectives*, New York: Free Press.
MacCormick, Neil, 1995. "Maastricht-Urteil: Sovereignty Now," in *European law Journal*, vol. 1, no. 3.
Mair, Peter, 2001. "The Limited Impact of Europe on National Party Systems," in Goetz, Klaus, H., and Simon Hix (eds.), *Europeanized Politics? European Integration and National Political Systems*, London: Frank Class.
———— 2005. "Popular Democracy and the European Union Polity," *European Governance Papers(EUROGOV)*, no. C-05-03.
———— 2007a. "Political Parties and Party Systems," in Graziano, Paolo and Maarten P. Vink. *Europenization. New Research Agendas*, London: Palgrave.
———— 2007b. "Political Opposition and European Union," in *Govemment and Opposition*, vol. 42, no. 1.

Marks, Gary and Carole J. Wilson, 2000. "The Past in the Present: A Cleavage Theory of Party Response to European Integration," in *British Journal of Political Science*, vol. 30.

————, Liesbet Hooghe et al., 2006. "Party Competition and European Integration in East and West: different structure, same casality," in *Comparative Political Studies*, vol. 39, no. 2.

Mattila, Mikko and Tapio Raunio, 2006. "Cautious Voters–Supportive Parties," in *European Union Politics*, vol. 7, no. 4.

McAdam, Doug, 1996. "Conceptual Origins, Current Problems, Future Directions," in Do. et.al., (eds.), *Comparative Perspectives on Social Movements, Political Opportunities,Mobilizing Structures, and Cultural Framings*, Cambridge: Cambridge University Press.

Mitchell, James, 1998. "Member–State or Euro–Region? The SNP, Plaid Cymru and Europe," in David Baker and David Seawright (eds), *Britain For and Against Europe*. Oxford: Clarendon Press.

Milner, Susan, 2000. "Eurosceptism in France and Changing State–Society Relations," in *European Integration*, vol. 22.

Parsons, Craig, 2003. *A Certain Idea of Europe*, Ithaca: Cornell University Press.

Parodi, Jean–Luc, 1992. "La Double Consulation de mars 1992. A la Recherche d'un Modèle," in Philippe Habert et al., (eds.), *La Vote Eclaté.Les Elections Regionales et Cantonales des 22 et 29 mars 1992*, Paris: FNSP.

Pennings, Paul, 2006. "An Empirical Analysis of the Europeanization of National Party Manifestos, 1960–2003," in *European Union Politics*, vol. 7, no. 2.

Poguntke, Thomas, Nicholas Aylott, Robert Ladrech, and Kurt Richard Luther, 2007. "The Europeanization of National Party Organisations: A Conceptual Analysis," in *European Journal of Political Research*, vol. 46.

Pridham, Geoffrey, 2008. "European Party Cooperation and Post–Communist Politics: Eurosceptism in Transnational Perspective," in Szczerbiak, Aleks and Paul Taggart (eds.), *Opposing Europe? The Comparative Politics of Eurosceptism*, vol. 2, Oxford: Oxford University Press.

——— and Pippa Pridham, 1981. *Transnational Party Cooperation and European Integration*, London: Allen & Unwin.

Ray, Leonard, 1999. "Measuring Party Positions on European Integration: Results from an Expert Survey," in *The European Journal of Political Research*, vol.36.

Raunio, Tapio, 2002. "Why European Integration Increases Leadership Autonmy within Political Parties," in *Party Politics*, vol. 8, no. 4.

———, 2006. "Political Parties in the European Union," in Rosamond, Ben et al (eds.), *Handbook of European Union Politics*, London: Sage.

Richardson, Jeremy, 1995. "The Market for Political Activism: Interests Groups as a Challenge to Political Parties," in *West European Politics*, vol. 18, no. 2.

———, 1996. "Organized Interests as Intermediaries," in Jack Hayward (ed.), *Elitism, Populism and European Politics*, Oxford: Oxford University Press.

Roger, Antoine, 2007. "L'impossible Appropriation de l'Union Européenne par les militants des Partis Politiques Nationaux," in Olivier Costa et al. (eds.), *Une Europe des Elites?*, Edition de l'Université de Bruxelles.

———, 2008. "Clivages et Partis Politiques," in Belot, Celine, Paul Magnette et Sabine Saurugger (sous la direction de), *Science Politique de l'Union Européenne*, Paris: Economica.

———, 2009. "The Impact of European Policies on National Political Parties:a Theoretical Outlook," in Dieter Fuchs et al. (eds.), *Euroscpetism: Images of Europe Among mass publics and Political elites*, Opladen: Barbara Budrich Publishers.

Rovny, Jan, 2004. "Conceptualizing Party-Based Eurosceptism: Magnitude and Motivations," in *Collegium*, vol. 29.

Sartori, Giovanni, 1968. "The Sociology of Parties: A critical View," in Otto Stammer (ed.), *Party Systems, organisations, and the Politics of new masses*, Berilin: Free University of Berlin.

Sauger, Nicholas, 2005. "Sur la Mutation Contemporaine des Structures de la Compétition Partisane en France: Les Partis de Droite face à l'Intégration Européenne," in *Politique Européenne*, no. 16.

Scarrow, Suan, E., 1994. "The "Paradox of Enrollment": assessing the costs and benefits of party membership," in *European Journal of Political Research*, vol. 25, no. 1.

Schmidt, Vivien, 1999. "National Patterns of Governance under Siege: The Impact of European Integration," in Beate Kohler-Koch and Rainer Eising (eds.), *The Transformation of Governance in the European Union*, London: Routledge.

————, 2005. *Democracy in Europe. The EU and National Polities*,Oxford: Oxford University Press.

Schmitter, Philippe, C., 2000. *How to Democratize the European Union*, London: Rowman & Littlefield.

Seyd, Patrick, Jeremy J Richardson and Paul Whiteley, 1994. *True Blues: The Politics of Conservative Party Membership* ,Oxford: Clarendon Press.

Sitter, Nick, 2001. "The Politics of Opposition and European Integration in Scandinavia: Is Euro-Sceptism a Government- Opposition Dynamic?," in *West European Politics*, vol. 24, no. 4.

Spriering, Menno, 2004. "British Eurosceptism," in Robert Harmsen and Menno Spiering (eds.), *Eurosceptism. Party Politics, National Identity and European Integration*, Amsterdam: Editions Rodopu B.V.

Szczerbiak, Aleks and Paul Taggart, 2008a. "Introduction: opposing Europe? The Politics of Eurosceptism in Europe," in Do., (eds.), *Opposing Europe? The Comparative Politics of Eurosceptism*, vol. 1, Oxford: Oxford University Press.

————, 2008b. "Introduction: Researching Eurosceptism in European party Systems," in Do., (eds.), *Opposing Europe? The Comparative Politics of Eurosceptism*, vol. 2, Oxford: Oxford University Press.

————, 2008c, "Theorizing party-based Eurosceptism," Do., (eds.), *Opposing Europe? The Comparative Politics of Eurosceptism*, vol. 2, Oxford: Oxford University Press.

Taggart, Paul, 1998. "A Touchstone of Dissent: Eurosceptism in Contemporary Western European Party Sys-

tems," in *Journal of European Political Research*, vol. 33.
Thomassen, Jacques and Hermann Schmitt, 1997. "Policy Representation," in *European Journal of Political Research*, vol. 32.
Tournier-Sol, Karine. 2007. "La Montée de L'UK Independence Party dans les Annees Blair," in Agnes Alexandre-Collier et al. (eds.), *Le Royaume-Unie et l'Union Européenne depuis 1997*, Dijon: Editions Universitaire de Dijon.
Tsoukalis, Loukas, 2003. *What Kind of Europe?*, Oxford: Oxford University Press.
Wallace, Helen, William Wallace, and Mark A. Pollack, (eds.), 2005. *Policy-making in the European Union* (5th ed., Oxford: Oxford University Press.
Weisbein, Julien, 2001. "Le Militant et l'Expert: Les Associations Civiques face au Système Politique Européen," in *Politique Européenne*, no. 4.
Wieland, Joachim, 1994. "Germany in the European Union - The Maastricht Decision of the Bundesverfassungsgericht," in *European Journal of International Law*, vol. 5, no. 1.
Zuckerman, Alan, 1975. "Political Cleavage Conceptual and Theoretical Analysis," in *British Journal of Political Science*, vol. 5, no. 2.
サルトーリ、G・一九九二年、『新装版——現代政党学』(岡沢・川野訳)、早稲田大学出版部。
白鳥浩、二〇〇八年、『現代欧州統合の構造:「新しいローマ帝国」と国民国家』、芦書房。
鈴木一人、二〇〇八年、「ブレアとヨーロッパ　1997—2007年」、細谷雄一編『イギリスとヨーロッパ』、勁草書房。
畑山敏夫、二〇〇四年、「もうひとつの対抗グローバリズム——国民国家からグローバル化への反攻」、畑山・丸山編『現代政治のパースペクティブ』、法律文化社。
パーネビアンコ、A・二〇〇五年、『政党』(村上訳)、ミネルヴァ書房。
マンハイム、K・一九五二年、『政治学は学として可能であるか』(樺訳)、創元社。

レモン、ルネ・一九九五年、『フランス政治の変容』（田中・塚本訳）、ユニテ社。
安江規子、二〇〇七年、『欧州公共圏：EUデモクラシーの制度デザイン』慶應義塾大学出版会。
柳田陽子、二〇〇六年、「欧州憲法とフランス社会党――2004年12月1日の党内賛否投票をめぐって――」『国際関係学研究』、第32号。
吉田徹、二〇〇三年、「現代フランス政治における主権主義政党の生成と展開」『ヨーロッパ研究』、vol.2。
――、二〇〇四年、「フランス政党政治の『ヨーロッパ化』――JPシュヴェンヌマンを中心に」『国際関係論研究』、vol.20。
――、二〇〇八年、『ミッテラン社会党の転換――社会主義から欧州統合へ』、法政大学出版局。